

日本経済信頼からの再生

制度信託の設計思想

星 岳雄、松島 齊 編著

本書の表紙に描かれた、「日本経済 信頼からの再生 制度信託の設計思想」というタイトルを眺めただけでは、本書の内容をイメージし難いかもしれない。しかし、扉を開いて少し読み進めば、日本再生をめざす成長戦略や技術革新という時の流れに抗して、社

資本と信託」と、終章「社会的共通資本を超えて——制度信託の思想」で、8人の研究者による八つの章が挟まれている。序章と終章のタイトルを眺めれば、容易に理解できるように本書は、故宇沢弘文東京大学名誉教授の提唱した「社会的共通資本」を参照基準に纏めあげられている。

東京大学 名誉教授
神野 直彦 評

宇沢名誉教授の「社会的共通資本」は「自然環境」、「社会的インフラ」、「制度資本」という三つの範疇に弁別されている。

会の基盤を成す「制度」への「信頼」を回復する重要性を訴える好書であることが容易に理解できるはずである。しかも、日本に視野を限定せずに、現代社会に突き付けられている「持続可能性(サステナビリティ)」の課題にも応答しようという気宇壮大な構想にもとづいている。

本書の構成をみると、編者による序章「社会的共通



社会基盤なす制度の信頼回復訴える

産を取り上げる二つの章を、「制度資本」の部には医療、教育、金融を扱う三つの章を配置している。こうした「社会的共通資本」が適切に維持・管理されてこなかった結果が、社会の持続可能性が問われるような事態を引き起こしているけれども、それは個々の制度設計の失敗というよりも、「制度」が社会から信頼され続ける条件が考慮してこなかったからだとして、本書は「制度信託」という新しい構想を提起する。

この「制度信託」の構想は、財産信託に着想があるとしても、宇沢名誉教授の「社会的共通資本」の管理は職業的規律に従う専門家に信託されるという構想を発展させたものということができる。

「制度信託」の構想は、「社会的共通資本」の公共目的を達成するために、委託者でもあり受益者でもある市民自身が、「制度」の設計や運営に関わることを重視するとともに、市民の声を吸収し続け、「制度」

を進化させていく社会的装置として企図されている。つまり、「制度信託」は問い続けられる制度として、人々が少しずつ育てていく、「信じて託せる制度」として構想されているのである。

評される。本書をてがかりに、この時代に特有であった暮らしの機微や文化の多

「アナログ文化の最高到達点」

読 書



「二十四時間戦えますか？」とモーレッツ社員が働くCMが当たったのが35年以上前のこと。

だが令和時代のいま、残業は罪になった。社内の自席にいるときは寛いでスリッパや裸足で過ごすことは許しても、身なりや体形が



ノーメイク鑑定士

石田 夏穂 著

がさう員... 説をる昨

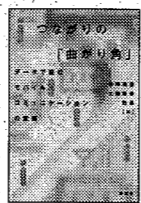
どう見えるかルッキズムには意外と厳しい。〇〇ハラスメントぎりぎりのところで人間関係は踏みとまり、一人でののが好きなくせに社内の融和を気にかける。

「ノーメイク鑑定士」は



両極端に振れたが

■『つながりの「曲がり角」』松田美佐、土橋臣吾、辻泉編
モバイルメディアの本格普及から30年。当初は通話が主だった携帯電話も、音楽やラジオ番組の聴取に加え文字によるコミュニケーションが進み、決済機能も広がり、今や片時も手放せない必需品だ。携帯の普及と機能高度化による生活の変化、現代人が直面するモバイルの「曲がり角」を20年間の全国調査データ



本書には、10カ国における10カ所の美術館の絵画盗難事件が反リヒザンして、身の代金